

愛知県若年層方言の地理的分布の傾向

尾張北部・尾張三河境界・渥美半島地域の Web 調査から

松川芽衣 水野友裕 安井望恵 吉田健二

1. 本稿の目的

本稿は、愛知淑徳大学文学部国文学科「国語学演習」の2020年度の4学年次生のうち、愛知県の方言を卒業研究テーマにえらんだ3人の学生の卒業論文の成果をまとめたものである。松川が尾張北部から名古屋、安井が名古屋から三河西部、水野が三河南部の渥美半島を調査しており、全県的な調査ではないが、愛知県を南北にみわたすことができる。

本演習では、2014年度より毎年「学外教育活動」として言語調査を実施しており、筆者たちは2019年度の調査を実施している（吉田・他2020で報告）。本稿で報告する調査はこの成果をふまえ、それぞれの地域の言語の状況をさぐる目的で計画したものである。吉田は計画段階から参与し、以下で報告する分析も他の筆者とともにおこなった。表題のとおり今回はインターネット上の調査によるデータ収集であり、結果の信頼性は臨地調査と比較して劣る可能性もあるが、得られた知見は過去のものとは整合しており、未詳の部分をおぎなう点もある。今後、さらに調査・研究をすすめるにあたって参照すべき観察をふくんでいると判断し、報告することとした。詳細はそれぞれの卒業論文（松川2020、水野2020、安井2020）にゆずり、ここでは重要な知見と、追加分析の結果を報告する。

2. 調査

本稿のための調査をした2020年は臨地調査がむずかしかった。次善策として Web 上に調査システムを設定して調査協力者（以下、短縮のため「話者」とする）に参加を依頼し、データを収集する方法を採った。3名とも Google Form アンケートシステムを利用した。詳細は各人の卒業論文を参照いただきたい（本稿末尾を参照）。インターネットを利用した調査は、情報提供者と直

接対面する必要がなく手軽にデータ収集ができるため、政府・自治体や企業体の研究機関等だけでなく、言語研究者にも利用がすすんでいる（鏈水・三井 2014、田中・林・前田・相澤 2016、吉田・南波 2019 など）。しかしその方法上、回答の信頼性に問題が生じうることは否めず、得られた結果の解釈には慎重な態度が必要となるだろう。この点については7節で結果の総括とあわせてふれる。

3. 調査項目とねらい

著者3名の調査の目的はそれぞれ異なるが、いずれも若年層の地域言語の使用・意識の地理的分布をさぐることを目的としており、得られた知見が相互に補完する部分もある。調査項目は過去の調査（吉田・他 2015～2020）の知見をふまえ、筆者それぞれの生育地近隣の地域のことばにたいする観察にもとづく地理的分布にかんする仮説を検証するねらいでえらんだ。フェイス項目をのぞく調査項目は(1)～(3)のとおり。調査文などの詳細は各人の卒論を参照されたい。下線をほどこした項目は、その文末・接続形式等の調査を目的とする。太字は、3名の調査間で重複している項目である。(1)の「模造紙」は(3)の「B紙」と、(2)の「机をもちほこぶ」は、(3)の「ツルの使用」と、それぞれたずねかたが異なるが重複する面がある。以下4～6節で、調査の概要と結果の一部を報告する。

- (1) 尾張北部地域（松川）：久しぶり、（身体が）だるい、（濡れて）びしょびしょ、**最下位**、ひっかく、**仏教僧**、**沈殿する**、**端**、**模造紙**、**体育館**、**明明後日**、**朝礼台**、**来ない**、**行けない**、**怒られたじゃない**、**寝坊したので**、**勉強して**
るね、**お花見だよ**
- (2) 尾張・三河境界地域（安井）：**机をもちほこぶ**、**雑に**、**最下位**、**沈殿する**、**一昨日**、**くすぐったい**、**早くしなさい**、**食べてみて**、**りんごでしょ？**、「**早くしなさい**」の意の「**はよしりん**」「**はよしやー**」の印象、「**食べてみて**」の意の「**たべりん**」「**たべやー**」の印象
- (3) 渥美半島地域（水野）：**朝礼台**、「**肉**」の意味、**とてもおもしろい**、**小学校の通学グループ**、**信号の点滅**を形容する擬態語、**ジョーブイ**（丈夫だ）の使用、「**やぐい**（壊れやすい）」の使用、「**どうざい**、**どめんどくさい**、**どう**

るさい（とても鬱陶しい等）」の使用、イレモン（容器）の使用、コケた（ころぶ）の使用、シタベラ・シタベロ（舌）の使用、ザイショ（実家）の使用、ツル（机を持ち上げてはこぶ）の使用、ハヨコイ（はやくこい）の使用、ホーカ（授業間休み）の使用、「B紙」の使用、「鍵をカウ（かける）」の使用、セバイ（狭い）の使用、ダイドコ（台所）の使用、「連れ」の意味、クズス（同額の小額に交換する）の使用、組み分けじゃんけんの掛け声

4. 結果（1）尾張北部地域

4.1. 地域区分と話者の構成

松川（春日井市生育・在住）による調査は愛知県北部から名古屋市にいたる地域の言語状況をさぐることが目的である。86人から回答を得たが、若年層の状況をさぐる目的から40歳以上の話者のデータをのぞいた。他県の方や、愛知でも三河地域の方が参加してくださったが、これも除外し、のこる59名（男性13人、女性46人）を以下の分析の対象とする。平均年齢は24.2歳（男性29.5歳、女性22.7歳）。話者の生育地は一宮市から名古屋市にわたる。分析の目的から「一宮（21人）」「北尾張（9人）」「名古屋（19人）」「知多（10人）」の4地区に分ける。一宮は北尾張地域に属するが、話者数がおおいので「北尾張」（岩倉、稲沢、犬山、江南、小牧、春日井、丹羽郡＝大口町か扶桑町かは不明）から独立させた。「名古屋」の話者は16区のうち「守山・西・北・昭和・中・中川・緑」と、南北にわたる。「知多」としたのは、半田市、知多市、知多郡阿久比町、知多郡東浦町と比較的名古屋にちかい市町である。愛知西北端の一宮から知多半島北部の半田市まで、およそ連続した地域になる。

4.2. 明瞭な地域差がみられなかった項目

この地区の調査結果は、明瞭な地域差がみられなかった項目がおおい。具体例として「模造紙」「来ない」を図1にしめす。4地区を南北にならべ、回答の構成比を表示した。数字は回答数。凡例の回答がないばあい、となりあった回答のあいだ（分割線上）に「0」をおく。

「模造紙」をさす「B紙」は愛知などの方言として知られており、今回の調査

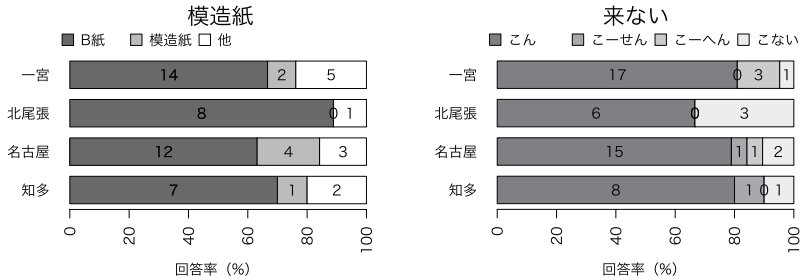


図1 尾張北部：地区ごとの語形回答率（数字は回答数）（1）

でも回答率がたかかった。「来ない」も従来の「こやせん」の変異形「こーせん」もみられたが、「こん」が圧倒する。明瞭な南北にかけての増減はなく、「全域で優勢」という状況だとおもわれる。紙幅の都合で図は省略するが、「寝坊したので」の「したで」、「行けない」の「いけん」、「だるい」の「えらい」、「最下位」の「どべ」も、全域で優勢だった。これらは、たとえば旧名古屋市域のみでもちられるといったように、狭域のおけることばの独自性をしめすものではなく、尾張地域、あるいはさらに広域でもちられる方言形式だとおもわれる。若年層で勢力が衰えていない方言形にはそのようなものがおおく、名古屋都市圏でことばの平準化がすすんでいることを示唆する。

また、「明明後日」は「ささって」が一宮・知多に一件ずつだけで「しあさって」が圧倒しており、やはり明瞭な地域差はみられない。

4.3 域内で地域差がみられた項目

いっぽう、地域差の存在を示唆するかとおもわれる結果をしめしたのものもあった。図2に4項目をしめす。学校などの運動場におく演説などのための台は2014年度調査からとりあげており、広域に分布する「朝礼台」とならんで、「指令台」が名古屋市以北に分布することがわかっている（吉田・他2016:244）。日本女子大学「日本語学演習」2020年度の調査（未報告）では首都圏でまったくしられておらず、東海でも狭域でのみつかわれる語形だとおもわれる。2019年の追調査でも犬山～東海市のみにみられた（吉田・他2020:186）。今回も名古屋以南では皆無という結果で、過去の結果と一致する。

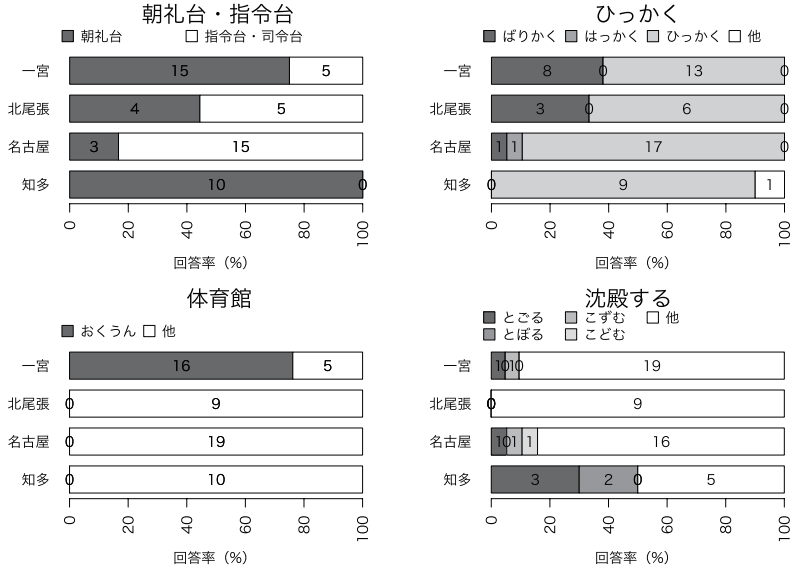


図2 尾張北部：地区ごとの語形回答率（数字は回答数）（2）

「ひっかく」の意の「ばりかく」は、山田（2017a:323）で岐阜美濃地方のほか愛知にもあるとするが、今回の結果では岐阜にちかい北部地域にかたよった。これが実際の分布傾向をしめすかどうかは未詳で、今後の調査をまつ必要がある。

特殊な成立事情により一宮でのみ通用すると報告されている「体育館」の意の「おこうん」（中田 2010）は、今回の調査でも一宮のみで回答があり、ほかでは皆無だった。依然として隣接地域に受容されていないことがわかる。朝礼台の結果ともあわせると、今回の話者の生育地情報などの情報に一定の信頼性があることがうかがえる。

「沈殿する」意の動詞は2017年調査でしらべたが、存在を予測していた「こずむ・こぞむ」が得られなかった（吉田・他 2018:195-196）。全体として「他」とした語形（「沈殿する」「しずむ」などの標準語形）がおおいが、方言的語彙では「とごる」が比較的優勢で、その音訛形とみられる「とぼる」も知多で2件の回答があった。「こずむ」とその音訛形とおもわれる「こぞむ」は一宮と名古屋に1件ずつと、勢力はつよくなかった（5.2節も参照）。

がある。平均年齢は男性 21.3 歳、女性 21.5 歳でほぼおなじ。以下では「名古屋市 (14 名)」「東海市 (11 人)」「知多郡東浦町 (16 人)」「知多郡武豊町 (8 人)」「東三河地域 (12 人)」の 5 市町に区分して検討する。名古屋は 16 区のうち「守山・中・中川・名東・昭和・瑞穂・天白・緑・南 (区の申告なし 1 名)」で、南北にかけて市の東部の話者がおおい。三河地域についてはおおくの話者から回答を得られなかったので、「刈谷市、知立市、安城市、碧南市、高浜市、岡崎市、幸田町、西尾市」のデータを「西三河」としてまとめた。

5.2. 方言形使用度に地域差がみられた項目

この地域の調査では、過去の調査および安井 (知多郡東浦町生育・在住) 個人の経験から、尾張～三河で方言形式がきりかわると予想される項目をおおくとりあげた。結果、地域差がかなり明瞭に観察されたものがすくなくなかった。図 4 にそれらを取りあげる。5 つの調査地は名古屋から南へ知多半島中部の武豊、西へ移動して西三河という順でならべた。4 節とおなじく各方言形の構成比をしめす。

「勧誘・やさしい命令」の「りん」「やー」は 2017 年度から継続調査をしている項目で、ここではその調査文 3 種のうち 2 種をしらべた。吉田・他 (2020:179-180) で尾張～三河にかけての「りん」から「やー」へのうつりかわりをみた。今回の調査により、未調査だった、両語形の切り替えがおきるとみられる東浦～半田あたりの若年層のようすがわかる。動詞「食べる」「準備する」のいずれについても、名古屋から西三河にかけてじょじょに「やー」から「りん」の語形に切り替わる (「他」は「食べてみて」「食べてみ」など、愛知県方言特有ではない語形)。尾張的な「やー」から三河的な「りん」への切り替えが漸進的な (急ではない) ことがわかる。

「机などをもちあげて運ぶ」意の動詞は東海市あたりで「つる」から「ずる」に切り替わるが (吉田・他 2020:186-187)、今回の結果から変化がやはり漸進的なことがうかがえる。とはいえ、三河で「ずる」が圧倒的優勢になるのではなく、「もつ」「さげる」「はこぶ」など地域特有でない語の回答 (凡例の「他」) もふえる。山田 (2017b) 457 図でも「ずる」は知多地域に集中してみられており、

三河地方ではこの意味領域について地域特有の語の勢力はそれほどつよくないとみられる。

推量などの文末詞については、三河で優勢な「だら」(彦坂 1994)が調査地域内で漸進的に勢力をつよめる結果が得られた。尾張地方は共通語的な「でしょ」が優勢だが、4.4 節でもみたとおり断定辞「や」をふくむ形式もみられる。

「雑に」の意の「だだくさ」は、語形が方言らしいためか、使用度はたかくないが、西三河をのぞく地域で回答があった。山田 (2017b) 388 図で岐阜全域から尾張地方にみられるのと整合する。安井の父親(知立市生育)がつかう「らんごく」は回答がなかった。

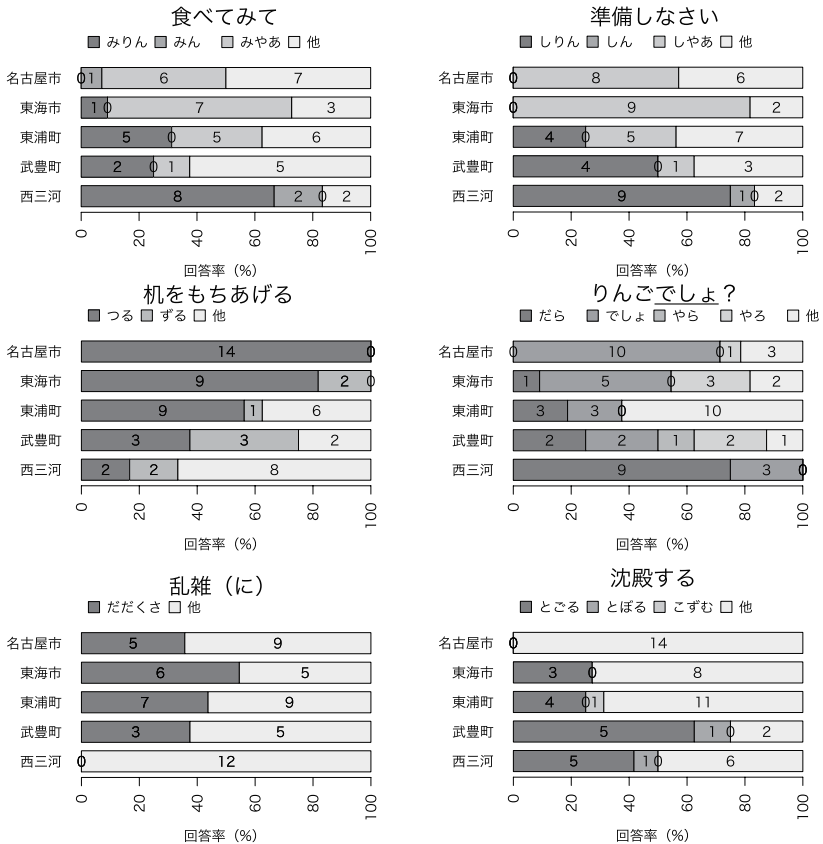


図 4 名古屋～西三河：地区ごとの語形回答率 (数字は回答数) (1)

「沈殿する」意の動詞は尾張北部地域調査でもとりあげた(4.3節)。知多地域で「とごる・とぼる」がみられたが、こちらの調査でも「とごる」が武豊・三河で優勢だった。ここでも、「とごる」とおなじ地区で「とぼる」がみられ、両者の関連(また誤入力等でないこと)の可能性がたかい。「こずむ」は東浦の1人からにとどまる。篠崎(1997)は愛知に「こずむ」を報告するが、今回の調査で優勢なのは同論文が三重などに報告する「とごる」だった。この方面からの伝播かどうかは今後検討したい。

5.3. 明瞭な地域差がみられなかった項目

「最下位」については「びり」「どべ」が有力だが両者とも全域にみられ、明瞭な地域差がみられなかった(「どべ」が優勢)。北尾張地域の結果(4.2節)と一致する。「一昨日」も「おととい」「おとつい」が拮抗しており明瞭な地域差はみられなかった。詳細は安井(2020)にゆずる。

もうひとつ、「くすぐったい」を前半部・後半部にわけて図5にしめす。吉田・他(2020:184-185)でこの地域旧来のコソ系の後退、新形式コショ系の台頭のきざしを報告したが、今回の結果もこの傾向をうらづけ、若い世代でコショ系が優勢になっている傾向をうかがわせる。後半部についても、パイー、バエーという長音形が消え、パイ、バユイに替わられる傾向を報告したが、今回の結果もこれと整合する。旧来の方言形式に変容がくわわった新方言形が一定の勢力を維持しているという吉田・他(2020:184)の暫定的結論の蓋然性がたかくなった。地域差は明瞭ではなく、みとおしは今後の調査結果をまつ必要がある。

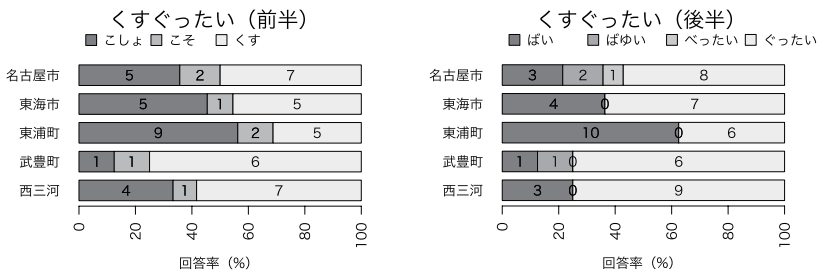


図5 名古屋～西三河：地区ごとの語形回答率(数字は回答数)(2)

5.4. 地域対立のある方言形式の印象

5.2節でみた、「りん」「やー」によるやさしい命令について、それを使用している（ふだん耳にする）か否かで印象が異なるかどうかについても調査した。今回調査した2種類の調査文の命令形式を「りん」「やー」にしたものを提示し、評価語についても「きつい」「かわいい」に限定した。5地区それぞれの平均評価値を図6に示す。いずれも「～りん」の印象をヨコ軸、「～やー」をタテ軸に表示している。また、ヨコ軸は1（左端）が「きつい」、5（右端）が「きつくない」、タテ軸は1（下端）が「かわいい」、5（上端）が「かわいくない」である。タテ軸の値とヨコ軸の値が等しいところに補助線をあてた。左列では、補助線の上（左）に位置するばあい、「やー」のほうがきつい命令、という判断になる。「飲む」「準備する」ともに、自身で「やー」をつかう傾向がよい「名古屋」「東海」の話者が、「やー」のほうがきつい命令だという印象をもつ傾向がある。自身の使用は「りん」が優勢になる「武豊」「西三河」では互角か、「りん」がきついという印象になり、両者の使用が拮抗する「東浦」では印象もこの中間になる。

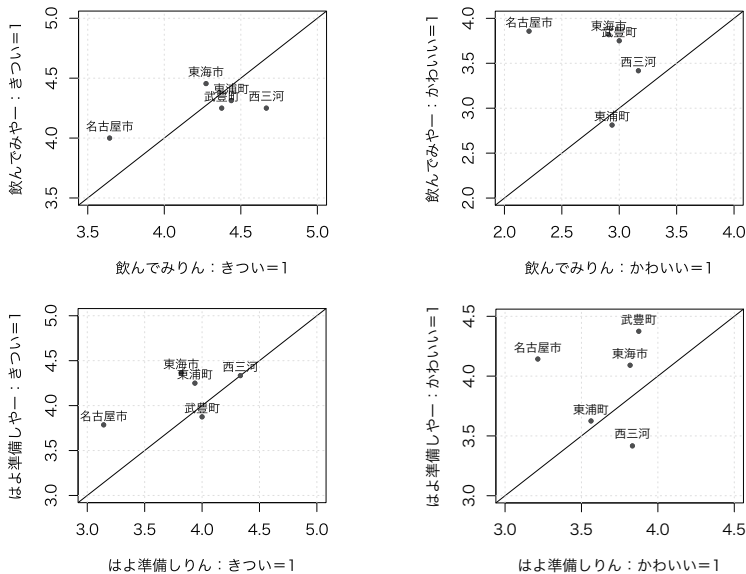


図6 名古屋～西三河：「りん」「やー」による命令の評価（平均値）

右列では、補助線上部（左）に位置する地区がおおい。「りん」のほうが「かわいい」という印象を意味する。自身では「りん」の命令をつかう傾向がひどい「名古屋」「東海」でとくにこの判断の傾向がつよい。吉田・他（2018:183）で述べたとおり、使用される地域でさまざまな人によるさまざまな文脈での使用に直接ふれる経験をもたない人々との印象が、使用や受容による直感をもつ人々とは異なるということだとかんがえられる。

5.5. 地域・方言の帰属意識

以上のように名古屋～西三河では地域的特色をもつ変異形の使用や意識についてちがいがみられたが、「尾張か三河か」という明瞭な対立ではなく、連続的・漸進的な移行であることがうかがわれる。このような地域でくらす人々は、みずからの地域やことばについてどのような帰属意識をもっているだろうか。このことをさぐるため、「5～15歳の間に一番長く住んでいた地域はどちらだと思っていますか」「ご自身の言葉を、どこの方言だと思っていますか」という質問に「愛知（1）～三河（5）」の5段階での回答をもとめた。地域ごとの平均点を図7にしめす。予想どおり「名古屋」ではほほうたがいなく「尾張」、西三河では全員一致でうたがいなく「三河」という結果となった。中間の3地域も行政区分どおり「尾張」よりの判断が優勢である。いっぽう、方言意識はこれより判断が不明瞭になり、両極の「名古屋」「西三河」の値もややちかづき、中間地点の値は「地域としては尾張だがことばとしてはすこし三河より」という意識をもつ傾向がみられる。とくに、尾張・三河の結节点的な位置にある東浦町の話者にこの傾向がつよいようである。

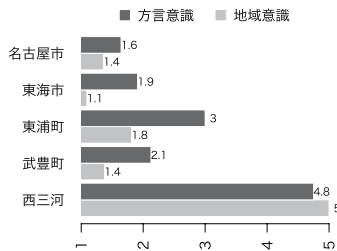


図7 尾張か三河か：地域の帰属とことばの帰属意識
(1=尾張～5=三河：地区ごとの平均値)

6. 結果 (3) 渥美半島地域

6.1. 地域区分と特徴

水野（田原市旧赤羽根町生育）による渥美半島地域調査では71人から回答を得た。男性49人・女性22人。年齢の範囲は22.7～23.9歳とひじょうにせまく、平均年齢は本稿を執筆した2020年12月の時点で23.3歳（男性23.2歳・女性23.3歳）と男女差もほぼない。話者が言語習得期（～15歳）をすごした地域は愛知県田原市と豊橋市の一部にまたがる。現田原市を2003, 2005年の合併以前の旧市町にわけ、豊橋市の話者（3人）を「田原」とあわせて、半島西端から「渥美（27人）」「赤羽根（17人）」「田原・豊橋（27人）」の3地区に分けて結果を集計する。

ことばづかいに関係する可能性がある話者の属性を地域ごとにみる。図8は両親が東三河地域の出身かどうかにたいする回答である（渥美半島は東三河地域に属する）。すくなくともいっぼうの親は東三河出身という人が大多数をしめており、ことばについても東三河の特徴をよく習得・反映する人たちだと推測される。その傾向はとくに半島西端の旧渥美町の人々に顕著である。図9に愛知県外の居住歴があると報告したかどうかで分類した結果をしめしたが、どの地区についてもかなりの人に県外居住歴がある。この傾向はとくに旧田原町・豊橋市の話者につよいようである。

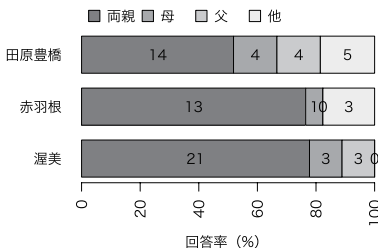


図8 両親は東三河生育か

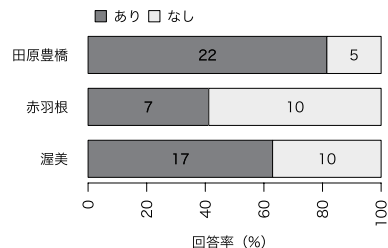


図9 愛知県外の居住歴

6.2. 結果に地区によるちがいがみられなかった項目

まず、ほぼすべての話者がおなじ回答だったり、ちがう回答でも地区によるちがいがみられなかった項目を報告する。「朝礼台・司令台」は「渥美」地区

の1人をのぞく全員が「朝礼台」だった。4.3節でみた尾張北部の結果と整合する。唯一「司令台」を回答した話者は18歳以降名古屋在住で、そこで習得した可能性もかんがえられるが、学校以外で耳にする可能性がひくい語なので疑問がのこる。「こける」「放課」も1人（いずれも「司令台」とは別人物）のをのぞく全員が「つかう」だった。調査地域をふくむ広域で通用することばだと推測される。

6.3. 地域の変異形が西部によりみられた項目

つぎに、地域的特色をもつとみられる回答が西部（半島先端）にいくほどおおくみられる傾向があった項目をみる。図10はこの傾向があると判断した8項目の回答率である。

山田（2017b）によれば、「実家」の意の「在所」（228図）、「丈夫い」（282図）は、岐阜美濃地方から渥美半島まで分布する。「作りがよわい」の意の「やぐい」（652図）も飛騨南部から愛知全县に分布する。「したべら」（257図）も飛騨～尾張～西三河～渥美に、接頭辞「ど」（481図）は、尾張北部～美濃西部を中心に分布する。お金を「くずす」意の「こわす」も中部～北陸の広域で通用するとおもわれる。このように、この8項目で西部地区の回答率がたかい変異形は、渥美半島に特有のものではない。この結果は、東海地域で広域的に分布していた旧来の方言形が、渥美半島西端にいくほど若年世代にも維持される傾向があることをしめすとおもわれる。このような傾向が生ずる理由のひとつとおもわれるのは、図8でみた両親の生育地の地域差である。渥美半島西部にいくほど、親世代（あるいはそれ以前）から東三河地域に根付いた話者がおおくなり、地域的特色の濃いことばを継承する傾向がたかいということである。

図11の2項目「だいどこ（台所）」「せばい（狭い）」も、使用率はさがるが、上記8項目とおなじく、西で使用率がややたかい。

6.4. 地域の変異形が東部によりみられた項目・その他

前節の10項目とことなり、東海地域特有の方言形が半島東部側によりおおくみられた項目を4つあげる（図12）。小学校の登下校グループの「通学団」

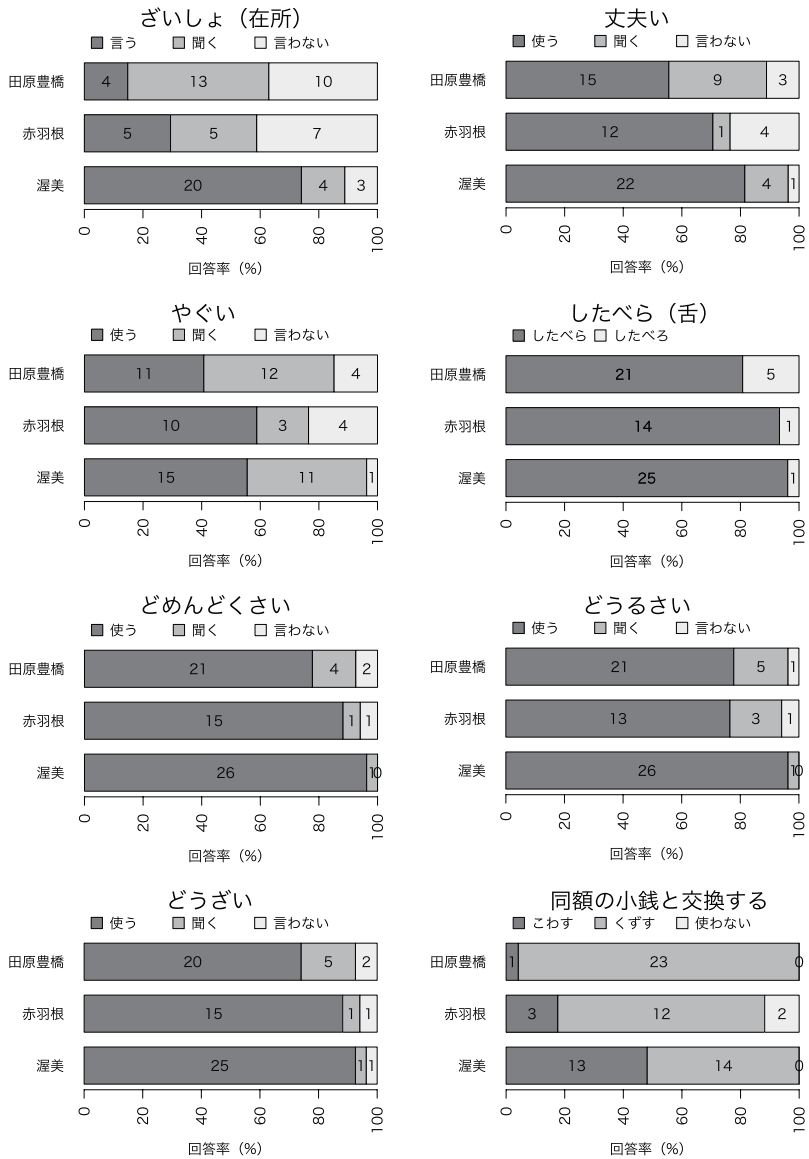


図 10 渥美半島：地区ごとの語形回答率 / 使用率（数字は回答数）（1）

は昨年度の調査（吉田・他 2020:180-181）では調査地のうち南の地域で優勢だった。ここでは全般的に「通学班」が優勢で、東の「田原・豊橋」で「通学団」がやや有力となる。これは尾張南部からの「通学団」の勢力が三河地域のどこかでよまわり、渥美半島先端まではじゅうぶんとどいていないことを示唆する。西～東三河についてこの点の検証が必要である。

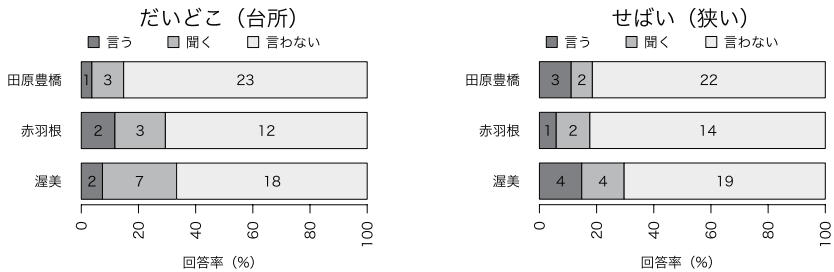


図 11 渥美半島：地区ごとの語形使用率（数字は回答数）（2）

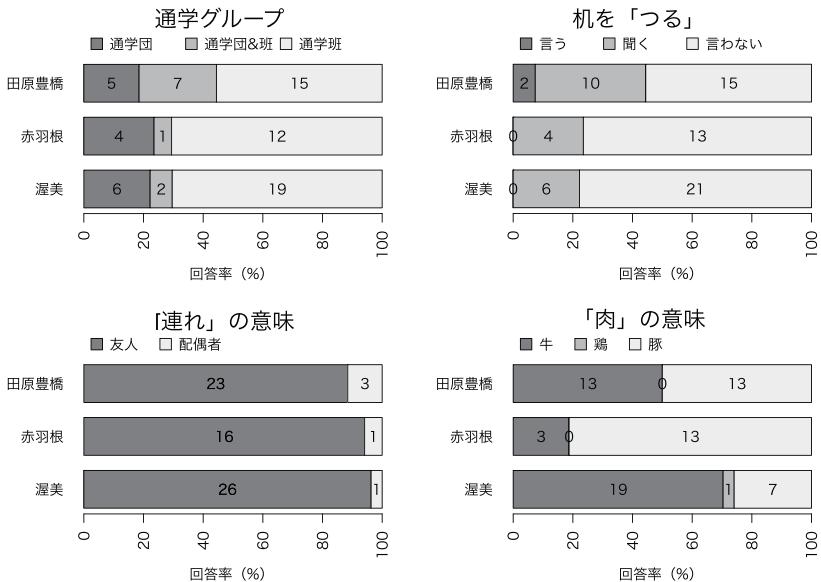


図 12：渥美半島・地区ごとの語形使用率（数字は回答数）（3）

机をもちあげて運ぶ意の「つる」が名古屋市南部から西三河で「ずる」に勢力をゆずることは5.2節でみた。渥美半島調査では「つる」の使用をたずねたが、「使わない」がおおかった。これは東三河でもひきつづき「つる」の勢力がよわいからであろう。半島東部で「言う」「聞く」がややおおくなるのは、半島のうちでも「つる」の勢力圏に地理的にちかいためであろうか。この両項は前節のものとは逆に、もともと渥美半島地域で勢力がよわい変異形が、半島西端でより勢力をよわめる傾向を反映するとみられる。

「連れ」の意味について「友人」が圧倒的優勢なのは昨年度調査の結果と整合する(吉田・他 2020:181-182)。半島内での地域差ははっきりしない。

「肉」の意味は、西の「渥美」で「牛」が優勢で、これは昨年度調査でみた近畿の「牛」の東進(吉田・他 2020:183-184)が、渥美半島でも(対岸の伊勢志摩にちかい?)西端でよりすすんでいるということかもしれない。いずれもさらに検討する必要がある。

7. 尾張～三河の地域差の「構造」

5.2節で尾張から三河地域にかけての方言分布の連続性をみた。地区間で方言形使用率が推移するのはわかったが、どの個人がどの方言形を回答したか、どの方言形は共通して回答される傾向があるか、ということまではわからない。その情報も利用することで、地域差にどのような「構造」がひそんでいるかを多変量解析の手法をもちいて探索する。図4のもとなるのは「話者(61人)×回答した方言形(6項)」について、「みりん」「みやあ」「つる」「ずる」などの回答があたえられたカテゴリカルデータである。そこでここでは対応分析(correspondence analysis)によって、話者および方言形間の関係の視覚的把握をこころみた(R言語 MASS パッケージの mca (多重対応分析) 関数を利用: R Core Team (2020))。データは話者61人全員分の回答、回答方言形は図4凡例のとおりである。第1・2軸の寄与率は13.7%と10.7%とたかくない。回答の個人差がおおきいためだとおもわれる。図13に結果をしめす。

第2軸(タテ)下方に「しん」「みん」という稀な回答が負のおおきな値をとっており、特異な回答傾向だったことを示唆する。この回答を外して(「他」と分類して)再分析を実行したが、結果はほとんどかわらなかった。第1軸(ヨコ)は右方(正)に「つる」「みやあ」「やら」「だだくさ」など、尾張側の地区で

おおく回答された方言形が、左方（負）に「しりん」「みりん」（「しん」「みん」も）「だら」「とぼる」と三河側の地区でおおく回答された方言形が位置する。地域ごとに話者の軸得点の平均を算出して重ね描きしたが、このならびに対応して左から三河～武豊～東浦～東海・名古屋とならぶ。

第1軸が尾張（正）と三河（負）とをわける軸だと解釈できる。5地域はこの軸にそっておよそ直線的にならんでおり、地域のちがいは比較的単純で一次的だということが推測できる。また、図6でみたとおり地域のちがいは連続的だが、西三河がほかとややなれている（回答傾向がおおきく異なる）こともわかる。5.1節で述べたように、この地区が刈谷から幸田まで西三河の広い範囲をふくむためかもしれない。東浦はほぼ原点に位置し、尾張～三河の中間的な回答傾向だったことも確認できる。話者個人の第1軸の得点は図7でみた方言帰属意識、地域帰属意識とつよく相関しており（直線回帰で $R^2 = .472, .467$ ）、これら6項目について尾張的あるいは三河的な回答をしていることが、個人が尾張方言・三河方言のいずれを使うと意識するか、また間接的には出身地が尾張・三河のいずれの地域に属すると意識するかとつよくかかわることもわかった（第2軸との相関はほとんどない）。

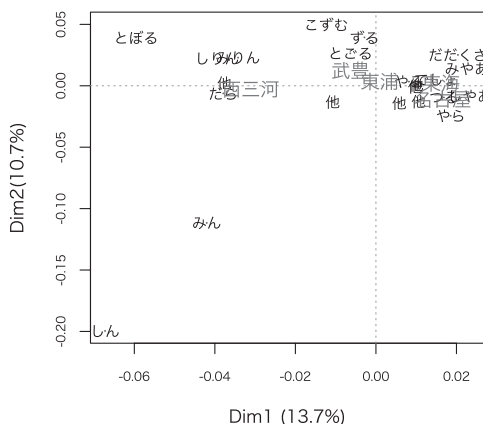


図 13：尾張・三河境界地域で方言形が変化する6項目（図4）による対応分析の結果

8. まとめと課題

愛知県の若年層（10歳代後半～30歳または40歳以下）のことばの使用・意識・印象について、3地域の調査結果を分析して得られたおもな知見を整理する。まず使用については以下の傾向がみられた。

- (4) 北尾張地域では、若年層にも健在な方言形について地域平準化が進行し、明瞭な地域差がない（4節）
- (5) 尾張・三河の境界地域では、尾張的・三河的な方言形式が漸進的にいれかわる（5節）
- (6) 渥美半島地域では、旧来の方言形式の維持傾向がややたく、半島先端にいくほどその傾向がつよい（6節）

(4) についてはいっぽうで、4.3, 4.4節でみたように、域内での地域差を示唆する項目もあった。(5) については、7節での検討から、その地域差の構造が（調査した項目については）比較的一次元的・単純なものであることもわかった。

ことばの意識・印象については、以下の傾向がみられた。

- (7) 日常接する周囲の人から耳にし、自身でもつかう方言形と、そうでない方言形では、「きつい言い方」「かわいい言い方」のような印象がくいちがう。（5.4節）
- (8) 地域帰属意識と方言意識にはずれがあり、尾張・三河境界地域では方言意識が他方の領域に（とくに三河よりに）ひきよせられる。（5.5節）

(7) は過去にも指摘してきた点で（吉田・大橋 2017, 吉田・他 2018）、巷で流行る「かわいい方言」などのレッテル貼りが、断片的な接触や地域ステレオタイプにもとづく漠然としたものである可能性を示唆する。(8) については、(5) のような連続性が意識されることが、「この地域のことばはすこし三河っぽい」という感覚が醸成される背景にあると予想される。

国立国語研究所の「首都圏の言語の実態と動向」研究プロジェクト（三井・編 2014）により、首都圏若年層の非標準語的なことばに、東北 vs. 西南という対立が見出された（鏑水・三井 2014）。そのちがいは「境界」というより傾向的なものであり、また両地域にはそれぞれ、周辺部との連続性がみられるという（三井 2014:13）。これを、北関東的な要素と南関東的な要素がいきあう接触

地帯が東京都心部に生じているとみてよいとすれば、本稿でみた愛知県の若年層のことばの地域差には首都圏の状況と似たところがありそうにおもわれる。尾張的な要素と三河的な要素が接触し、言語意識・使用の両面で漸進的な推移がみられるのが、知多半島の付け根、今回の調査地のうちでは東浦町周辺ということになる。

上記プロジェクトは、東京を中心とする言語圏が周辺領域へ拡大しているという認識のもとに実施された面があるが、この点について「地方の大都市でも多かれ少なかれこのような現象がおこっている」との推測もしめされている(久野 2014:20)。上記(4)の平準化傾向は東海地域における言語圏の拡大を反映したものである可能性がかんがえられる。いっぽう、4.3, 4.4 節でみたように、この言語圏の北部では周縁の岐阜方言との連続性を示唆する地域差もみられた。また、6.3 節でみたように、最南部の渥美半島では、その西端にいくごとに旧来の方言形の維持がつかまる傾向もあった。

同プロジェクトによる成果のうち久野(2014:20)は、首都圏若年層に「伝統方言でもなく、単なる共通語でもないことば」が使用される傾向を指摘する。本稿でも「くすぐったい」の「こしょぐったい・こしょばゆい」や、「怒られたがん」「お花見やおね」など、東海地域における地域方言形の改新形がみられた。過去に報告例がみあたらない「こずむ」の「こどむ」、「とごる」の「とぼる」のような変異形も、(誤入力等の可能性も残るが)、この例にあたる可能性がかんがえられる。

2 節で述べたとおり、本稿のデータは対面調査ではないため、回答の信頼性に疑問がのこることは否定できない。いっぽうそれぞれの節でみたとおり、おおくの結果が臨地調査による先行研究の結果と整合しており、Web 調査によるデータ収集に一定の信頼性があることもうかがわれた。インターネットを利用した調査をおこなうばあい、臨地調査も実施し、両者の結果を照合して結果の信頼性を判断しながら研究をすすめる必要があるだろう。本演習でも東海地域についてさらに調査をすすめる、確実な知見を蓄積していきたいとかんがえている。

謝辞 Web 調査に回答して下さったおおくのみなさま、草稿にコメントをくださった増井典夫先生、この形式による投稿を許可して下さった国文学会に感謝申し上げます。また、せっかくご協力いただいたにもかかわらず目的の関係でデータを除外したみなさんにはこの場をかりておわびもうしあげます。

参考文献

- 久野マリ子 (2014) 「首都圏方言の形成と共通語化」三井はるみ・編 (pp.19-38)
国立国語研究所 (2018) 「全国方言分布調査 (FPJD) 調査結果・新日本語地図 (NLJ) データ」http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html
篠崎晃一 (1997) 「気づかない方言 5 「沈澱する」」『日本語学』16 (9) :89-91.
田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫 (2016) 「1 万人調査からみた最新の方言・共通語意識: 「2015 年全国方言意識 Web 調査」の報告」『国立国語研究所論集』11:117-145.
中田敏夫 (2010) 「「屋運 (おくうん)」の成立—愛知県一宮市における屋内運動場名の背景—」『国語国文学報』(愛知教育大学) 68:24-38.
彦坂佳宣 (1994) 「東海西部地方における推量辞の分布と歴史」『国語学』179:90-102.
松川芽衣 (2020) 「方言のグラデーション—尾張地域内の語彙や意識のちがい」愛知淑徳大学卒業論文
水野友裕 (2020) 「東三河における方言使用の現状」愛知淑徳大学卒業論文
三井はるみ・編 (2014) 『首都圏言語研究の視野 首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書』立川: 国立国語研究所
安井望恵 (2020) 「知多半島の言語実態調査」愛知淑徳大学卒業論文
山田敏弘 (2017a) 『改訂増補統一版 岐阜県方言辞典』科研費研究成果報告書
山田敏弘 (2017b) 『改訂増補統一版 岐阜県方言辞典 ～岐阜県・愛知県 方言地図～』科研費研究成果報告書
鍵水兼貴・三井はるみ (2014) 「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」三井はるみ・編 (pp.73-83)
吉田健二・大橋里帆 (2017) 「音声による方言推定と評価 なじみによるちがい」

- 『第 105 回日本方言研究会発表原稿集』 pp.17-24.
- 吉田健二・南波茉奈 (2019) 「Web 調査による若年世代方言の全国分布」『日本語学会 2019 年秋季大会予稿集』 pp.89-96
- 吉田健二・他 (2015) 「三重県北・中部方言の現状：予備調査報告」『愛知淑徳大学国語国文』 38: 124-150.
- 吉田健二・他 (2016) 「三重・愛知県境地域における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』 39:218-250.
- 吉田健二・他 (2017) 「三重・愛知・岐阜県境地域の言語使用と言語意識」『愛知淑徳大学国語国文』 40:207-242.
- 吉田健二・他 (2018) 「東海地域における方言使用と印象」『愛知淑徳大学国語国文』 41:167-198.
- 吉田健二・他 (2019) 「東海地域の言語実態調査 (1) 第一次計画と 2018 年度調査結果」『愛知淑徳大学国語国文』 42:176-208.
- 吉田健二・他 (2020) 「東海地域の言語実態調査 (2) 愛知県尾張地域と三河地域のちがいを中心に」『愛知淑徳大学国語国文』 43:173-192.
- R Core Team (2020). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.
URL <https://www.R-project.org/>.

本稿のもととなった卒業論文研究をふくむ、2020 年度「国語学演習」(吉田担当) の卒業論文集 (電子版・PDF) を作成する予定です。ご参照くださるかたは、吉田健二 (kenjiyo.work@gmail.com) までご連絡ください。